



Intraocular pressure at different gaze positions in patients with highly myopic strabismus

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 浜松医科大学 公開日: 2023-04-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 新井, 慎司 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/00004350

論文審査の結果の要旨

強度近視性斜視（HMS）は内斜視の一つであり、軸性近視により眼軸長が延長し、眼球後部が上直筋と外直筋の間から筋円錐外に脱臼し発症する。甲状腺眼症の斜視では、眼球運動制限のある方向へ動かすと眼圧が上昇するのは既知であるが、HMSでの眼球運動における眼圧の変化は検討されていない。また強度近視は緑内障の危険因子であり眼圧の管理は重要である。本研究ではHMS及び斜視のない対象患者の正面及び側方視時の眼圧を測定し、HMSの特徴を検討した。2012～2021年浜松医科大学医学部附属病院（研究番号16-024）または山形大学医学部附属病院（H28-138）でHMSと診断された14名18眼を対象とした。斜視のない51名51眼をコントロール群とし、さらに正常群と強度近視群に分類した。年齢、性別、屈折度数、矯正視力、眼軸長、斜視角の情報を収集し、HMS群では外転制限の程度とMRI画像上での脱臼角を計測した。眼圧は正面、外転位、内転位で測定した。

3群間（正常群、強度近視群、HMS群）の眼圧の比較では、HMS群では外転位の眼圧が正常群と強度近視群に比べ有意に増加し、内転位ではHMS群で有意に低下した。外転位と内転位の眼圧差は、HMS群において、他の群に比べ有意に大きく、斜視角と脱臼角に対し正の相関、外転制限に対し負の相関を認めた。外転位と内転位の眼圧差はHMSの重症度を反映しており、その圧格差が生じる理由としては、内転位では、眼球後極部が筋円錐外に脱臼することで眼窩内や外眼筋の圧力から解放され眼圧が低下するためであり、また外転時には眼球が圧迫され眼圧が上昇するためであると考えられた。

本研究では、HMSにおいては異なる視方向で眼圧が大きく変化することを初めて明らかにするとともに、正面だけでなく側方視の眼圧測定が内斜視の鑑別に有用であることを示した点を、審査委員会では高く評価した。以上により、本論文は博士（医学）の学位の授与にふさわしいと審査委員全員一致で評価した。

論文審査担当者

主査 黒住 和彦

副査 佐藤 康二

副査 中村 友彦